様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １９ 日現在

機関番号：３４４１６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ０２１４８

研究課題名（和文）ソーシャルワークの社会学的再検討による教育・実践理論の構築―シカゴ学派を補助線に

研究課題名（英文）Adopting the Chicago School of Sociology Perspective for Developing Educational and Practical Theories of Social Work

研究代表者
西川　知亨（NISHIKAWA, Tomoyuki）

関西大学・人間健康学部・教授

研究者番号：５０５８２９２０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：　シカゴ学派社会学の人間生態学から、理論的および社会学的方法論上の二分法を統合する総合的社会認識の視点を引き出した。その理論的視点をもとにして、貧困、児童福祉、地域福祉などの福祉的課題に対抗するソーシャルワークの教育および実践に資する理論化および言語化を試みた。「エコマップの『向こう側』と『こちら側』」への分析的視点が、ソーシャルワークに資する可能性を示すことで、社会学史と社会福祉学の融合可能性を導出した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　第1に、「社会学／社会学史と社会福祉学」という研究領域の未開拓性に関するものである。第2に、総合的社会認識の社会生態学という方法論的視座に特徴がある。第3に、社会学的再検討を加えたソーシャルワーク教育という実践的意義である。総じて本研究は、「総合的社会認識の社会生態学」を補助線とすることで、社会学のみならず福祉方法論上の二分法を総合し、問題発見力とコントロール力を高める福祉教育を構想・実践することができる意義を有する。

研究成果の概要（英文）：From the Chicago school of sociology, I derived synthetic perspectives that integrate the theoretical and methodological dichotomies of social work. Based on this theoretical perspective, I attempted to develop social work strategies that can enhance education and practice in addressing welfare concerns such as poverty and child and community welfare. By demonstrating the potential value of adopting an analytical approach to the “other side” and “this side” of an eco-map for social work, I identified the possibility of integrating the history of sociology and social welfare studies.

研究分野：社会学

キーワード：ソーシャルワーク　シカゴ学派　総合的社会認識　社会学的再検討　人間生態学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

生活困窮、高齢化、被災、介護、児童養護、地域解体などの問題をはじめ、現代では多くの福祉的課題が累積し、十分な支援が行き届かずに多くの人々の人権が脅かされている。そのような課題の解決を目指す実践的な方法として、人と社会をとりむすぶ「ソーシャルワーク」が注目されている。しかし、現在のソーシャルワーク教育は、ミクロレベルの面接技術教育や制度の説明に終始しがちなことが大きく疑問視されている（『福祉新聞』平成 27 年 11 月 18 日）。現代の日本の福祉の授業では、ミクロな場面でのコミュニケーションについては一定の支援法を提供してきたが、他方で、福祉的課題の構造的要因や社会的背景を不可視化してしまうこともある。こうした教育をひとつの背景として、多くの福祉の現場においても、支援が持続しなかったり、福祉従事者のバーンアウト（　燃え尽き症候群）を引き起こしたりするなど、総合的な問題要因分析とコントロール（有効な援助の創発）を可能にする「異元結合」（異なる次元のものを結合させて別次元のものを生成させる所作）が不十分な状態が続いている。一方で、ベテランのソーシャルワーカーは、実際に福祉の現場において、上記の問題を解決するような実践を行っていることも事実である。種々の福祉の現場において実践されているソーシャルワークに学びながら、それを批判的にとらえて洗練化を図ることが必要である。

２．研究の目的

本研究は、さまざまな福祉の現場で実践され、社会福祉士養成校などにおいて教育されている「ソーシャルワーク」およびその教育法について、シカゴ学派の社会生態学などの観点からとらえなおすことで、福祉方法論上の二分法を総合する実践理論の構築を行い、総合的社会認識の福祉・実践教育の可能性を探ることを目的とするものである。

この目的に沿った本研究は、次の 3 点について明らかにできるという意義を有する。

第 1 に、「社会学／社会学史と社会福祉学」という研究領域の未開拓性に関するものである。社会学はとくに実践面において、また社会福祉学は、実証および社会的背景の把握において課題を残しているが、社会学と社会福祉学の方法論を横断することで両者の弱点を補完するだけでなく、社会学的検討を加えた新たなソーシャルワークの実践理論の構築を構想しうる。

第 2 に、総合的社会認識の社会生態学という方法論的視座に特徴がある。前述のように、方法論や価値観の偏りは、時に福祉実践での足枷となる。本研究においては、研究代表者がこれまでのシカゴ社会学史研究において整理した「総合的社会認識の社会生態学」を補助線とすることで、社会学のみならず福祉方法論上の二分法を総合し、問題発見力とコントロール力を高める福祉教育を構想・実践することができる。

第 3 に、社会学的再検討を加えたソーシャルワーク教育という実践的意義である。貧困問題のみならず様々な福祉的課題は、人間的・文化的生活の危機、および人命がかかわる喫緊の課題である。本研究を通じて、本来、有機的な相互関係を結ぶべき【理論】【実証】【実践】【教育】をめぐる社会学的および社会福祉学的ループを総合させることで、社会学的再検討を加えたソーシャルワーク・モデルを構築できれば、社会・福祉問題に対する持続的なコントロール法となり、人々の「安全・安心」社会の構築に貢献しうる。

３．研究の方法

福祉方法論上の二分法を総合する方法として、本研究で活用するのは、第 1 に【理論】として「（1）シカゴ学派の社会生態学」である。これには、ミクロ-マクロの力動性を理論に組み入れるため、生活史（ライフヒストリー）や第二次シカゴ学派の相互作用秩序論の考え方も射程に入れるものである。第 2 に【実証】として、上記（1）を活用した「（2）貧困対抗活動の生態系論」について考察する。第 3 に【実践】として「（3）現代社会の家族福祉実践」についての調査・分析、とくに具体的には「男性の育児」に焦点を合わせて考察する（拙編著『〈オトコの育児〉の社会学』参照）。第 4 に【教育】として、関西大学人間健康学部の「（4）社会福祉士養成課程の授業での取組みの分析へのフィードバック」を行う。これらを通じて、「ミクロとマクロ」にとどまらず福祉方法論上の二分法を総合する「社会学的想像力」（ミルズ）を展開させ、社会学的な検討を加えたソーシャルワーク論の構想・モデル化を目指すものである。新時代の人権・福祉社会の構築に向けて、多くの人が現代社会において、問題発見力とコントロール力を高めるささやかな武器として、人と社会をつなぐソーシャルワークの手法をもつ可能性についての研究を試みるものである。

４．研究成果

（1）本研究の主に理論的基盤となる成果として、単著『初期シカゴ学派の人間生態学の展開――総合的社会認識の社会学』（関西大学出版部、2021 年）を刊行した。本研究においては、現在のソーシャルワークが欠落しがちな二分法の総合的視点を提供するものと位置付けられる。同書では、総合的社会認識の社会学の考え方が見られる初期シカゴ学派の人間生態学について、社会学史的な検討を行った。人間生態学は、狭義の社会学理論というだけでなく、「実証」（社会調査）や「福祉」（人間健康学）に開かれた「社会学的想像力」の展開を可能にしてくれる道具であり、パースペクティブである。こうした生きた社会理論の視点である人間生態学は、現代の混沌とするアノミー社会における社会問題の要素還元主義、あるいは非自省的な帰責行為・活動による社会的排除の潮流などを背景にして再び注目されることで、過去の遺物として再び葬り去られる危機を乗り越えることが期待される。社会学のみならず、シカゴ学派と一度は仲違いをした福祉分野など、人々の社会生活にかかわる学問や活動の各領域においての活用可能性が、現在、試されている。同書についての書評が『ソシオロジ』（67 巻 3 号、2023 年）に掲載され、リプライ（「書評に応えて」）を行った。

（2）福祉実践も、「つながればなんとかなる」とされる時代から次の時代へと移行している。共編著『ポスト・ソーシャル時代の福祉実践』（関西大学出版部、2021 年）では、ソーシャルワークへ総合的社会認識の社会学を生かす方向性について論じた論考を発表したが、編者のひとりとして、編集・検討等において中心的な役割を果たした。社会学的に再検討したソーシャルワークのなかでも、コロナ禍も含め、時代状況について考慮に入れた著作・論文となっている。本書では、この「ポスト・ソーシャル時代」という言葉で、「ソーシャル時代」に軽視されがちな、地域福祉など草の根の福祉実践をはじめとして、ネットメディアによる「身体溶解」時代の「こころ・からだ・くらし」の人間健康学の意義について示すことを考えた（同書の「はじめに」を参照）。同書は、社会福祉の「社会」にかかわる「ソーシャル」をあらためて問いなおすものになっている。社会学の黎明期のデュルケムの「社会的事実」の議論以来、個人と社会の連携に関して、社会学は、社会学的想像力の関わる理論的パースペクティブと、それらを帰納的または演繹的に裏付ける社会調査を武器にして研究が展開されてきた。社会福祉学は、社会参加について、実践的な理論をもとにして、実際に個人と社会をつなぐ実践とその方法について模索してきた。社会福祉領域は現場での実践を重視するために、社会諸科学に比して一元的価値に埋没してしまう危険性が指摘されているが、同書には多様な視点を取り込んで福祉実践に活かす可能性が内包されている。社会福祉を「ソーシャル」という同時代的・学際的な視点でとらえなおした研究成果は、ソーシャルワークの教育現場への還元が試みられた。

（3）本研究課題にかかる「現代社会の家族福祉実践」については、本研究期間よりも前に刊行した共編著『〈オトコの育児〉の社会学――家族をめぐる喜びととまどい――』（ミネルヴァ書房、2016 年）での問題意識をもとにして、社会学的に再検討したソーシャルワーク論との関連で研究を進めた。その成果の一部として、近年の男性による育児に関する本への書評をし、また著者（巽氏）からのリプライを再検討するなかで（『ソシオロジ』64 巻 1 号、2019 年）、次のような考察を行なうことができた。第 1 に、育児実践における〈役割と居場所〉に関する社会観についてである。男性による育児に関して、居場所があって役割を果たすというよりも、「しかるべき役割を果たすことによって居場所を獲得できる」という解釈がなされがちであるが、このような考え方は、「家庭で役割を果たさないと、そこに居場所はない」という考えに反転する可能性を有する。父親を逆に家庭の場から排除し、そうでなければ果たせるはずの子育て役割を果たせなくさせる可能性もある。役割を果たすことで「社会（ここでは居場所）」とつながることを許される（正のサンクション）という社会観は、家族社会学などが批判的に検討してきたパーソンズの構造‐機能主義の考え方と相似してくる危険性を有する。福祉的な価値観からすると、「働かざる者食うべからず」的な規範が先行すると、諸個人を基盤とする社会は不安定化する。つまり、むしろ、「居場所があってこそ役割を果たせるようになる」側面もある。第 2 に、育児実践における広義のソーシャルワークの視点の必要性である。育児においてケアは重要な基盤となるが、それに焦点が当てられすぎると、見えなくなるものがある。子育てというテーマを分析する際、狭い家庭（夫婦とその子ども）内のケア労働に焦点を当てすぎると、地域や、（狭い意味での）家庭外の子育てを担う人々とのつながりがみえなくなる可能性がある。共働きの育児において、夫婦の親がサポートをしている場合は少なくないし、保育園などの諸機関・制度によるサポートも重要である。子育てが家庭に内閉化するという近代家族の轍を踏んでしまうことは望ましいことではない。第 3 に、ケア労働は両義的な性質をもつ。ケアワークが軽んじられる社会的傾向は、ケアワークが「誰でもできる」「単純労働」ととらえられてきたことと関係がある。またケアワークとは、子育てであれ介護であれ、悲しみや怒り、とまどいなどの否定的な感情を引き起こさせる「しんどい」ものであるということが、「介護殺人」、「虐待」などの用語の流布ととも

に明らかになっている。このため、ケアワークはしんどいもので、いかに「配分」するかが課題となってきた。だが一方で、子育てケアワークは、しんどいことばかりではなく、多かれ少なかれ小さな感動や発見も含めて、喜びもあり、それが子育ての持続可能性の一翼を担っていることは否定できない。ケアワークを聖化しすぎることなく、かつ困難な状況に埋没しすぎることなく、ケアワークの両義性についても目配りした分析が求められる。以上の第 1 の点は、米国の社会学史的考察、第 2 の点は、ソーシャルワーク教育実践、第 3 の点は、シカゴ学派社会学の総合的社会認識に観点から主に導きだされたものである。

（4）「①　ネットワーク系、②　『草の根』連帯経済系、③　グリーン／アース系、④　ソーシャル系」に整理する、研究代表者による日本の貧困対抗活動の生態系論の問題意識から敷衍して、福祉コミュニティ創生へのシカゴ学派の生態学観の活用可能性を追究した。その成果の一部は、共著書『世代と人口』（ミネルヴァ書房、2024 年）に発表された（以下、同書所収の論文を参照）。とくに、バージェス、フレイジア、リンド夫妻（シカゴ学派とは別の系譜の社会学者）、ワース、ゴフマンの業績を検討して、相互的社会認識によるコミュニティ創生、すなわち福祉分野では CSW（コミュニティソーシャルワーク）と呼ばれる活動実践の方向性について考察した。次世代の福祉コミュニティづくりの方法としては、コミュニティ・ソーシャルワーク（CSW）の方法が知られているが、利用者・行為者の「エコマップの『向こう側』と『こちら側』」を看過しがちである。エコマップとは、福祉の利用者を取り巻く環境の相関関係を図で表したものである。この研究においては、時代状況に即したシカゴ学派の各世代（第 1 世代～第 4 世代）および関連する周辺の理論を概観することで、人口の社会構造・変動・生態学的過程と、相互作用秩序の両者をとらえる視点を抽出し、次世代のコミュニティづくりに資する理論的視点を提示することを目的とした。シカゴ学派社会学史においては、「巨匠」のロバート・エズラ・パークの影響力の下、社会学と社会福祉学が切り離されて展開されてきた傾向にあったが、初期シカゴ学派のもう一人の「巨匠」のアーネスト・ワトソン・バージェスの問題関心に象徴されるように、社会学と社会福祉学は、協力関係も結びうる。もちろん本研究を通じて大それたことを言うことはできないが、社会学と社会福祉学の融合を試みることは、「古くて新しい」視点を提供することにつながりうる。ソーシャルワーク教育の場で考えてみれば、再帰的近代化が進行し、自己に過度な責任を負わされる社会的風潮のなかで、福祉実践が教科書通りに行かないと感じられることも少なくない。こうした状況のなかで、バーンアウト（燃え尽き症候群）を引き起こしがちなワーカー、あるいは、社会福祉士をめざす実習生にとって、「エコマップの『向こう側』と『こちら側』」の社会過程と秩序を相対化し、問題を整理して実践に志向する道具にもなり得ると考えた。下記の（5）にも関連するが、社会（社会福祉）調査は、理論や実践を裏付けるものである。本研究を通じて、福祉コミュニティ創生に向けて、シカゴ学派の生態学観の活用可能性を追究した結果は、以下の通りである。すなわち、「シカゴ学派の生態学観を補助線とした〈「理論モデル」「社会（社会福祉）調査」「福祉実践活動」〉および「地域診断」をめぐる社会学的・社会福祉学的交互作用」の概念枠組みである。「理論モデル」と「社会（社会福祉）調査」と「福祉実践活動」について、演繹的であれ帰納的であれ「理論モデル」と「社会（社会福祉）調査」を往還するのは、社会学が得意としてきたものである。それに対して、エビデンスに基づくソーシャルワークという形で「社会（社会福祉）調査」と「福祉実践活動」することを得意とするのが、社会福祉学である。それぞれ社会学史および社会福祉史として別々に行われてきた活動であるが、上記の（1）の社会福祉と社会学史の「分離と融合」の研究にも関連して、両者は相互補完的な関係にある。「理論モデル」と「社会（社会福祉）調査」と「福祉実践活動」は往還する。「理論モデル」と「社会（社会福祉）調査」は、「社会学的」交互作用を及ぼす。「社会（社会福祉）調査」と「福祉実践活動」は、「社会福祉学的」交互作用を及ぼす。また、「理論モデル」と「福祉実践活動」の往還は、理論モデルを重視した実践（福祉には限らないが）ということで、「社会学的実践」として知られたものである。理論モデルは、調査の桎梏・限界を自省しながら、調査と実践に志向するような「エコマップの『向こう側』と『こちら側』」を照射する視点を提供する。すでに見てきたように、それは、シカゴ学派の各世代の生態学観を参照することで豊饒なものとなる。「社会（社会福祉）調査」においても、生態学的過程におけるさまざまな位相のデータを得ることができる。量的調査がマクロな過程を把握し、質的調査がミクロな過程を把握しうるという教科書的な命題もあるが、「単位」に見られるように、ややマクロな位相も質的調査で分析しうるし、フィールド調査においても、数的概念は重要となりうるという意味でも、「質・ミクロ—量・マクロ」の区分は、部分的にであれ脱構築される。また、「福祉実践活動」もまた、社会変動、社会構造、コミュニティ、相互作用秩序、行為者など、生態学的過程のさまざまな位相に働きかける実践となる。結論としては、生態学的に検討したソーシャルワークの方法を媒介とし、社会学的想像力と社会調査を大事にしながら、両者への批判的・総合的思考を試みることが、次世代のコミュニティや福祉社会の構想にとって求められる。

（5）ソーシャルワーカーも活用しうるように福祉事例を盛り込んだ社会調査の共編著（三井さよ・三谷はるよ・西川知亨・工藤保則編,『はじめての社会調査』（世界思想社、2023 年））を刊行した。この作業のなかで、社会学史のみならず社会調査史のなかでの社会福祉調査、および質的データと量的データを組み合わせる混合研究法の意義について浮かび上がらせた。本研究における総合的社会認識の社会学、さまざまな二分法を総合する視点をとるパースペクティブにとって、混合研究法は、シカゴ学派が採用した社会調査方法論の一部の現代版である。量的調査と質的調査の組み合わせについては、シカゴ学派の質的調査表象のアンチテーゼとして、バージェス、およびフレイジアらのシカゴ・モノグラフにおいてみられるものであるが、シカゴ学派が行った収斂デザインあるいは説明的順次デザインだけでなく、実際の研究例はそれほど多くないが、探索的順次デザインの活用可能性も開かれている。

（6）総合的社会認識の社会学の基盤となるシカゴ学派の人間生態学の検討のなかで、（修正）社会病理学の視点が、ソーシャルワーク実践の言語化に資する可能性について示唆された。とくに、子ども家庭福祉にかかるソーシャルワーク実践および教育の言語化・充実化に向けて、社会学分野の逸脱論の可能性を追究する意義について浮かび上がってきた。活用しうるのは、逸脱論のなかでも、アンセルム・ストラウスや宝月誠による社会的世界論－構造論・相互作用論・行為者論であり、これは社会学における社会的コントロール論の一つである。ソーシャルワーク実践の文脈で解釈すれば、構造論は、エコマップの「向こう側」にある社会の仕組みに光が当てられる。相互作用論は、時間の流れのなかで、エコマップの「こちら側」にあるコミュニケ—ションの拘泥を相対化する視点を提供する。行為者論は、さまざまな関係性のなかで生きる子どもの社会心理と身体について理解可能なものにする。本研究を通じて、社会的世界論に、初期シカゴ学派由来の人間生態学および総合的社会認識論の視点を加えて活用し、社会的コントロール論から生態学的ソーシャルワーク論への展開をめざしている。その成果の一部は、数年内に公表予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 西川知亨	４．巻 67（3）
２．論文標題 書評に応えて	５．発行年 2023年
３．雑誌名 ソシオロジ	６．最初と最後の頁 115－119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 西川知亨	４．巻 64（1）
２．論文標題 【書評】巽真理子著『イクメンじゃない「父親の子育て」――現代日本における父親の男らしさと〈ケアとしての子育て〉――』	５．発行年 2019年
３．雑誌名 ソシオロジ	６．最初と最後の頁 140-144
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計5件

１．著者名 三井 さよ、三谷 はるよ、西川 知亨、工藤 保則（共編）　三井 さよ、三谷 はるよ、西川 知亨、工藤 保則、伊藤智樹、赤枝尚樹、仲修平、片岡佳美	４．発行年 2023年
２．出版社 世界思想社	５．総ページ数 232
３．書名 はじめての社会調査	

１．著者名 西川 知亨	４．発行年 2021年
２．出版社 関西大学出版部	５．総ページ数 326
３．書名 初期シカゴ学派の人間生態学の展開――総合的社会認識の社会学	

１．著者名 一般社団法人日本ソーシャルワーク教育学校連盟（編集）　安立清史、安達正嗣、西川知亨（編集委員）安里和晃、安立清史、安達正嗣、大山小夜、金子雅彦、川野英二、工藤保則、宍戸邦章、白波瀬達也、高山龍太郎、徳田剛、中島満大、西川知亨、野田浩資、濱西栄司、藤井和佐、堀薫夫、三隅一人	４．発行年 2021年
２．出版社 中央法規出版	５．総ページ数 256
３．書名 社会学と社会システム	

１．著者名 黒田研二、狭間香代子、福田公教、西川知亨（共編）　黒田研二、狭間香代子、福田公教、西川知亨、弘原海剛、涌井忠昭、村川治彦、山縣文治、森仁志	４．発行年 2021年
２．出版社 関西大学出版部	５．総ページ数 186
３．書名 ポスト・ソーシャル時代の福祉実践	

１．著者名 金子勇（編）　金子勇、赤川学、松宮朝、西川知亨、平井太規	４．発行年 2024年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 312
３．書名 世代と人口	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関